

オムスク大学（ロシア）を訪問して

明治大学名誉教授 渡辺 隆喜



最近の主要な新聞報道に、イギリスにおけるロシアの反体制派スパイの毒殺事件がある。この件で欧米 25 カ国は 200 人程のロシア外交官を追放したと言う。未だ、この問題解決のための着眼点は見つ

かっていない。同じような事件は、10 年前にも起こった。私が日ロ交流協会から、オムスク大学への集中講義を依頼された時である。私にとって、ロシアは近くて遠い国、得体の知れぬ縁遠い存在であったが、定年の年で、かつ好奇心もあって、受諾した。明治大学にロシア上院議員が訪れ、学術交流の申込みを受けたことも承諾するうえでの契機となった。口の悪い同僚は、ロシアでは毒殺に気をつけろと、笑いながら注意してくれたことを覚えている。

私は定年になって今年で 10 年。最初の年(71 歳・2007 年)から隔年で 3 回、オムスクを訪れている。昨年は北欧 4 カ国旅行で、サンクトペテルブルクを訪れているので、定年後 10 年間で 4 回、ロシアを訪れたことになる。いずれも権力の強大さを認識する旅であった。

最初の年は、シベリアの中心都市ノボシビルスクで、シベリア地区日本語弁論大会の審査委員長を務め、翌日、シベリア鉄道の特急で、西に 8 時間ほどのオムスクに移動した。

オムスクは西シベリア最大の州都で、かつて有名な小説家ドストエフスキーの流刑地であった。そのため、市や大学の名称に、彼の名を冠し、ドストエフスキー・オムスク市(大学)とも言っていた。彼の監獄は現在、博物館として一般に公開されている。このオムスクはカザフスタンに近く、120 万人の大都市で、大学は国立大学のみ 10 校あり、その中心の総合大学が私の訪問先であった。

オムスクへは成田空港から 10 時間のモスクワで国内線に乗り換え、ウラル山脈を超えて 3 時間ほど日本側へ戻るのが一般的訪問の仕方であったが、最後の第 3 回訪問(77 歳)の時は、北京経由で週一便のオムスク行きに搭乗した。渡航費は日本政府の国

際交流基金である。第 1 回から第 3 回までの 6 年間には、町中をわがもの顔で走っていた日本中古車が消え、大学トイレの汚さも、教員便所中心に改善が進んでいた。訪問した 5 月は気温が零度から 10 度で、もちろんコートが必要とした。

オムスク大学での講義は、第 1 回が「日ロ交流論」、第 2 回が「日本文化論」、第 3 回が「日本近代化論」で、各々 6 コマに区分して講義した。大学での私の講座定員は 150 人。多くの希望者が受講出来なかったと言う。それ程、日本に興味を持った学生が多かった。受講態度も熱心で、講義終了後は質問者が列をなす程であった。日本への留学希望者も多く、大学の現状を知りたい者も多かった。素直で健康的で積極的な学生が多く、日本の大学の 3, 40 年前を思い出させた。最近のひっこみ思案の日本の学生と異なり、彼らが成長した時、新生ロシアが誕生するように思われた。

私の滞在中、大学国際交流部はさまざまな行事を立案してくれた。市内名所訪問、劇場や博物館見学、



オムスク大学講義風景

大学保養施設訪問などのほか、第 2 回(74 歳)訪問の時には、日本フェスティバルの開催、世界青年会議への出席、第 3

回(77 歳)にはテレビ番組が組まれ、「地域と国際交流」が討議され、私が基調講演を行った。この行事と並行して、プーシキン図書館での公開講座、農業大学での特別講座(日本農業の現状)を 3 回とも担当した。

農業大学のゲストハウスが無料の宿泊所に用意されていたが、トイレトペーパー持参でと言われ、妻が同行したこともあり、宿泊事情の良いホテルに自腹で泊まることになった。裏を流れる大河の名をとって「イルティッシュ」ホテルと言った。1 泊 1 人朝食付き 5,000 円程で安かった。

オムスク大学訪問は、私にとって貴重な体験となった。